



これは、明治6年（1873）地租改正にともなって作成された春名山村（現榛名町榛名山）の地籍図（縦54cm×横137cm）です。榛名神社の門前町であった社家町や榛名湖等の様子が分かります。江戸時代の榛名神社は、上野の東叡山寛永寺の配下であり榛名山^{はるな}蔵殿寺として神仏習合の地でした。一般には榛名山寺、満行宮、満行権現などとよばれていました。江戸時代榛名神社一帯は、寛永寺の寺領でしたが明治2年（1869）寛永寺領が春名山村となりました。

江戸時代、庶民の間で榛名詣でが盛んになり、榛名講が組織され大勢の参詣客で社家町はにぎわいました。当時榛名山には、多くの御師^{おし}とよばれる人たちがいました。御師とは特定の社寺に属して、参詣者を案内し、祈祷や宿泊の世話をする者のことで、般若坊や泉学坊^{せんがくぼう}などといった坊号を名乗っていました。また、檀那場^{だんなば}とよばれる担当の区域（村）を持ち、お札配りや祈祷を行い、社家町に参詣者を泊める宿坊を営んでいました。

この絵図から中央の道沿いに宿坊が立ち並んでいた様子が分かります。当時は杉並木もありました。江戸時代、現在の関東地方はもとより遠くは長野県、福島県、新潟県までも榛名講がありました。このため、門前町である社家町は賑わい、最盛期の江戸時代中期には100軒近い宿坊と600人近い人口がありましたが、明治以降衰退しました。

〈参考資料〉『群馬県史』通史編3 971～973頁、『群馬県史』通史編6 778～781頁、『群馬県史』資料編26 55～59頁、『室田町誌』723～877頁